

Graduate School

of Integrated Arts and Sciences

そうごうかがくけんきゅうか
総合科学研究科

— 世界は文系でも

理系でもない —

専門分野を極めつつ、総合科学の知的技法をも身につけて、学際的・総合的な観点から客観的な評価を下せる「重点的ジェネラリスト」の養成。人間のあり方や生き方への深い理解と洞察を基盤に、総合科学の知的技法を活用して、「豊かな人間性を培う教育」を社会の現場に応用できる人材の育成。

このふたつを教育の理念に掲げ、広島大学大学院総合科学研究科は二〇〇六年四月、発足した。

専門分野を超えた文理融合の学際的・総合的な教育・研究を行うため、「研究科」専攻のかたちをとっている。その中に、人間科学・環境科学・文明科学の三部門。さらに、部門をまたがった三つの「二十一世紀科学プロジェクト群」が設定されていることが、カリキュラム上の大きな特色である。

総科大学院生インタビュー

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/soukain/index.html>

古典文化を最新の技術で

廖 継莉さん (D1)

— 唐詩の学習システムを研究なさっているようですが、それはどのようなものですか？

私が今研究しているのは、コンピュータ・ネットワークをベースにした唐詩のCALLシステムです。インターネット技術の発展に伴って、私たちはクリックしてウェブページを閲覧し、家にいながらにして欲しい情報を手に入れることができるようになりました。だから、私は唐詩の知識を教えるために、コンピュータ・ネットワークをベースにしたシステムを構築することを計画しました。

このシステムは唐詩の紹介、古典的な詩のデータベース、基本知識の引用と難解な語の注釈、詩集のモジュールなどを含んでいます。

— なぜ、唐詩の学習システムを研究されているのですか？

私の文学修士の論文は、唐王朝時代の詩の自然リズムを、コンピュータを使って研究することでした。そして私はこの研究を続けたいと思いました。

日本では中国語を習っている学生が多いことを考えると、私は、中国の伝統文

化に興味がある人々のための、唐詩のCALLシステムを研究できると思います。

— CALLとはどのようなものですか？

CALLは、「コンピュータ支援言語教育」の略称で、コンピュータ上での、語学の教授法や学習法についてのアプリケーションを模索し研究するものです。今、それはさまざまな教育の場で利用されています。

総合科学研究科には、私の先生である吉田先生のように、CALLについて研究している先生が何人かいます。

— ご自分の専門分野で、「総合科学」は具体的にどう生かされていますか？

私の研究は、多くの学問に関係します。例えば、内容は中国の詩に関するもので、それは古典文学に属します。詩の自然なリズムは言語学の知識を必要とし、ウェブページをどうデザインし、つくるかは、高度なテクノロジに関係します。だから、総合科学は、私の研究を促進し、実現するための総合的な観点を与えてくれます。

— なぜ日本の広島大学を選ばれたのですか？

私の中で、広島大学は日本で有名な大学です。まず、広島は平和を希求している場所で、世界中の人々を受け入れてくれます。

二番目に、広島大学で勉強している友達がいいて、彼らは環境や大学の条件がともよいと言っていました。

— 本国の大学と日本の大学の違いはどんなところにありますか？

現在、中国の大学は日本の大学と同じように、総合化の流れがあります。でも、中国の学生人数は日本より多いので、授業の方法や課程の設立はやはり相違点があります。

私が大学生のとき通っていた大学は単位制で、大学は四年間で百八十の履修単位を修了しなければなりません。だから専門科目以外、ほかの専門と学部 of 授業をたくさん履修しました。たとえば、私の専攻は言語と文学ですが、『高等数学』『経済学入門』『法律基礎』などほかの専門の課程を選ばなければなりません。特にコンピュータの授業は、ほとんど全ての学期にあり、主に文系の学生に対して役立つ文字編集とデータベース処理などの知識を学びました。

ダ・ヴィンチになろう

青山 昌義さん (M1)

「総合科学×大学院」

「文系に強い理系、理系に強い文系」という理念が狙いとして成立するような枠組みになっていますよね。普通の大学院だと狭い専門分野をさらに狭く分割、ということになっちゃうんでしょけいど。専門領域をやっている、その領域からはみ出したところに気になるところってありますよね。総科大学院には、ほとんどどんな領域の先生もいる。そういう人たちの知恵や学識を頂けるといのは、素晴らしいことですね。いよいよそういうことが期待できるんじゃないでしょうか。

「総合科学×学生」

ただ、先生方はどうしても横の繋がりがよりも先ず自分の専門領域を掘り下げないといけない。だから、総合科学の理念を実現する駆動力は先生じゃなくて学生だと思えますね。僕はたまたま物理をやっているけど、文系の授業にも出ています。そうした学生であるからこそ理系の分野のなにかを、文系のほうにも繋いでいくことが出来ると思うのです。先生方が理念の器を作り、学生が中身を詰める。楽しいじゃないですか。

「総合科学×人生」

専門分野だけをやるなら他の大学院の方がいいかも知れない。だけど、人間って、本来いろんなことに興味を持てる生き物なのです。その、「興味の能力」を畳み込んでおく必要はないわけです。若いときにそれに気付いて行動すれば、それはもう人生が豊かになること請け合いです。

物理も最初は哲学から派生したように、あらゆることが根っここのところで繋がっています。昔の人は、ひとりで総科大学院やっていたんですね。レオナルド・ダ・ヴィンチとかね。総合的にやるからこそ特定の分野の何たるかがよく分かる。結果的には全ての分野の見通しが良くなり、気が付けば、後世まで残る業績が。若い時には難しいことかも知れませんが、学生さんもそんな気持ちでやると、総科にきた意味があると思えますね。

総合科学は中途半端、と言う声を聞くことがあります。たしかに、専門に集中するほど高尚だとする考え方に立てばそう感じるかも知れません。しかし、それは自分が既存の枠組みに囚われていてから中途半端になるんだと考えるべきです。専門分野は多くの学際的な支えがあつて初めて成り立っています。自然や社会は不可分で、夫々に真理が隠されている。そのことに気付けば、もう総合科

学しかないじゃないですか。

多くの学生さんにとっては、大学は将来の目標実現のための単なるチェックポイントなのかも知れませんが、単位とらなきゃ卒業できないから、苦痛だけどころそこ頑張らなくて要領よく単位をとろうと、考えても不思議ではありません。だけど、学生の後に来る舞台がめちゃくちゃ面白いと言う保証はどこにもありません。だから今の毎日が苦痛でいいわけじゃないですね。日々、今日が面白くないといかん。毎日が面白くなるような生き方をしましようにというのが私の主張です。人生の一部分だけがハッピーな時間であればよいというのは間違いです。

私はもう後がありません。あとは棺桶しかない。残り少ない時間を棺桶目標に無為に生きるの馬鹿げています。だから、こうしてインタビュでしゃべること、最高の時間にしなきゃいけない。その積み上げとして自分の人生が価値あるものになると信じています。キーポイント？とにかく行動を起こすことです。そうすればいろんなことに出会え、いろんなことを感じ、自然が、人が、生き物が、好きになります。好き、即ちハッピーだと思えます。

己を知れば・・・。

蜂谷朋子さん (M1)

「大学生」

これは大学院に入っても変わらないと思うけど、学部生のときには、自分のことを知ってほしいです。

私が就職活動しようか進学しようかっていうときに、自分に何が向いているのかとか、どういう思考パターンとか、よくわからなくて。自分が思っていることと他人に聞いたこと、親が言うこともだいぶ違っていて、どうしていいかわからなくなりましたよね。どっちが正しいかは結局ないんだろうけど、やっぱり自分はこういうことが好きだ、とか、自分が確信をもってこうだ、っていえることもなかったし。相手が言ってるほうが正しいのかなあって思うこともあって、すごく揺れたんです。

そのとき、自分は忙しいほうがあって、って言って、仕事がすごく忙しい会社に入った友だちがいたんです。暇な会社で、自分でいろんなプライベートを楽しくするのもいいけど、やっぱり忙しい中でどんどんやっていくほうがあってるから、って。こんなふうに自分のこと言えたら、もっといろんなことが見えてくるかな、って思ってたんです。

やっぱり四年間ってすごく時間があって、一人暮らししてる人とか、自分で決めることがいっぱいあるし。いろんな場面で、自分がどういう人なのか考えられる要素がたまってると思うんですね。お酒がどれくらい飲めるとか、徹夜が何日できるとか、そういうのもいい。ほんとにどういうことが好きか、とか、貪欲に、自分がどういう人なのかを。自分もどんどん変わっていくし、絶対わからなくなるとは思うけど、でもそれをいろんなときに考えてほしいと思います。

あとは、頑張るってほしいです。大学生は、どこで何を頑張るかも自己責任だから、常に頑張らない方を選ぶ人もいますよね。卒業でさえ、頑張らなくてもできてしまうし。でもいざという時のために、頑張るスイッチを入れる練習は普段から必要だと思います。

「大学院」

大学院生に求められることは、教わることだけじゃないんだな、っていうのがやっぱり大きいですね。

総科の院にプロジェクト群があって、これは参加自由なんですけど、所属することですすめられるんですね。別にどこに入ってもいいんですけど。これに入ると、それぞれ先生たちが十人弱ずつく

らいついています。でも、その先生たちがプロジェクトに入った学生に教えるわけじゃなくて、その先生たちと一緒に、現場に行って調査したりだとか、プロジェクトをすすめていくっていう感じなんです。プロジェクトのことを聞いたときに、入って先生からいろいろ教えられるんだらうなあって、学部生の気分で思ってたから、一緒に、同じ視線で進んでいくっていう感じを強く受けて、院生ってそういう立場なんだ、っていうのをそこでやっと気づいたところがあるんですね。これが一番、院生らしいなあ、って思ったところです。

「総合科学」

私は、プログラムが違う友達がけっこういたから、その友達と話す中で、やっぱり全部つながってるんだなあ、って学部生の間でも感じていました。専門性があんまりないとか、総合科学なんか別にいい、とかいう人もけっこういますけど、あんまり私はそこはひっかかりを感じなかったんですね。結局全部つながる、って思ってしまったから。それが学部のとくに感じられたのは良かったかな。

(担当 17生 杉本 千明)